

大越国陳朝期の交易と海域アジア

菊池 百里子

はじめに

一千年にわたる中国の支配、いわゆる北属期のベトナム北部は、中国の南海交易において熱帯産品の集荷地となっていた。唐代末以降、ムスリム商人の中国南部への来航が活発化し、中国の港市にムスリム社会が成立する。宋代には、海南島から広西の一带はムスリム商人のネットワークと連結し、中国から東アジア、東南アジアの海域を巻きこんだ海上の交易ネットワークが発展していた。

その交易の担い手は、中国にさかんに朝貢していた東南アジア諸国の商人、そして海域アジアへの渡航と商業活動を活発化させていた中国人商人であった。とりわけ宋元代における東南アジア海域の交易ネットワークは活況を呈していた。この時代は、ベトナムの地では大越国李朝(1009-1225)から陳朝(1225-1400年)に該当する。

本稿では、大越国陳朝期の交易について、陸の視点で区切られた東アジア、東南アジアといった枠組を超えて、広くアジア全体を海の視点からとらえた海域アジアという視座から考察する。特に、交易を語るうえで考古学資料としての交易品は、その様相を物語る実証的なデータとして有効であり、海域アジアの消費地遺跡から出土した交易品、おもに陶磁器のありようを提示したうえで、流通遺跡の出土品とも比較して、その交易の様相を考察する。

1. 李朝期の対外交流

陳朝期の交易について語る前に、それ以前の李朝についても述べておく必要がある。中国から独立したのち、ベトナム北部には、1009年に李公蘊が李朝をたてる。李朝は都を華閩から、1010年に昇竜に移し、国号を大越国とした。宋代の史料には南海諸国からの朝貢が記されており、そのうちベトナムからの朝貢回数が最も多く〔桃木 1990:231 表 1〕、3～4年ごとの「常貢(進綱)」に加え、「賀昇平綱」などさまざまな名目の朝貢がおこなわれていた〔河原 1975:72-73〕。1174年には宋から安南国王に封じられ、実質的な独立国としての地位を確立する〔片倉 1972:98〕。とはいえ、李朝が支配したベトナム北部の紅河デルタ内外にはドンソン文化期と大差ない小規模な農業基盤や交易拠点による半独立在地勢力群が分布し、李朝はそれらの連合体として出発したとされる〔桜井 1980〕。

李朝期のベトナム北部を介した物品の往来にはどのようなものがあったのだろうか。李朝は、民間の交易のほかにも宋朝への朝貢をおこなっていた。李朝時は海路で欽州や廉州から、あるいは陸路で邕州から入貢しており、中国への朝貢品には犀角、象牙、玳瑁、絹、真珠、乳香、沈香、金酒器、金鶴亀、金器、銀器、銀炉、銀盆、金銀七宝装交椅、金廝羅、孔雀尾、馴象、馴犀などがあった〔河原 1975：75〕。

金銀器や馴象は、近世にいたるまで大越の重要な国際商品であり、朝貢品であった。沈香はベトナム北部で産出するものではなく、大越はチャンパーとの交易で沈香を入手し、それが中国に朝貢品として差しだされていた。そして、このチャンパーの沈香と交換する商品として馬を入手していたことが指摘されている〔桃木 1990：234〕。ただし、沈香はラオスの東側の山地でも産出することが確認されており〔米田 2000：34〕、チュオンソン山脈を越えてゲティン地域にいたるルートで運ばれていたものもあったろう。

ベトナム北部の海域において真珠が採取できる場所はハロン湾である。北宋の遺物が確認できたクアンラン島のコンクイ地点は、古くはクアンチャウ（光珠）社、現在はミンチャウ（明珠）社に属し、この地名は真珠を意味する。明代には「珠場」が置かれ、現在もヴァンドン県の北側の海域では真珠の養殖がおこなわれている。ただし、『大越史記全書』の 1066 年の記録には、爪哇商人がきて夜光珠を献じたとあり〔金 1937：69〕、李朝の輸出品であった真珠はヴァンドン一帯において生産されていたもののほかに、爪哇からもたらされたものもあったであろう。

李朝期に中国からベトナムに流入した商品としては、銭貨があげられる。唐代より、中国は銅や銭貨の輸出を禁止しており、宋代には再三にわたって銅銭の輸出を禁止し中国銭の流出の防止に苦心していた。しかし、巨額の中国銭が海外に流出していた〔桑原 1935：34-35〕。宋代には、ベトナムは頻繁に宋朝に朝貢し象牙や犀角、金銀器などを朝貢品として差しだしていたが、中国からは銭による回賜の記録が指摘されている〔桃木 1990：231〕。両税法が施行されており、10 世紀にわたる北属期で、北部ベトナムは銭の使用になじみ、給与の支払いのため中央政権も一定量の銭を必要としていた〔桃木 2011：140〕。ベトナムにおいて実施している一括出土銭の調査研究でも、膨大な量の宋銭が発見されており、海外に流出した中国銭は、ベトナムへも流入していたであろう。

2. 昇竜皇城遺跡出土品が語る交易

2002 年以降、ハノイ中心部のバーディン広場ではじまったホアンジウ 18 地点の発掘調査では、李朝期に都となった昇竜皇城の遺跡が発見され、19 世紀までの各時代の遺構とともに大量の陶磁器や建築部材が出土した。また、昇竜皇城より古い段階の遺物も多数出土し、この地が北属期の安南都護府であったことがあきらかとなった。膨大な出土遺物の整理には時間を要し、現段階で公表された遺物はほんの一部であるが、それまで欠乏していた李朝期以前の考古学にとって多くの資料を提供している。

なかでも豊富な建築部材の研究では一定の成果がみられる。それは、前昇竜段階とその後の昇竜皇城段階である李朝、陳朝期の瓦や磚に大きな変化が確認できたことで、中国からの独立を果

たし、それ以前の建物を壊して作り直していたためである。そして、各建築部材には中国とは異なる東南アジア的要素がみられ、その建築装飾のモチーフには仏教思想をしめす鴛鴦や菩提樹、火炎が多用されていること、独立王国としての王権をしめす竜や鳳凰の文様も用いられていることが指摘されている〔Nguyễn Văn Anh (et al.) 2012〕。

発掘調査では、7世紀から20世紀の遺物が出土しており、その大部分は10世紀から19世紀に生産された在地の煉瓦や瓦、礎石、建築の装飾物やベトナム陶磁器などであり、このほかに中国や日本、中近東地域などで生産された陶磁器がある。また、金製装飾品、鍵、金属製の鏃などが出土している。

李朝以前の遺物としては、内側に方形または円形の大きな目跡がある7世紀から9世紀の青灰釉碗皿が多数出土している。同様の製品はベトナム北部の塋室墓からも出土しており、ベトナム北部において一時期、漢から唐代の様式の陶磁器が流行していたことがわかる。李朝に特徴的な陶磁器は、白磁である。内面に范で花文を施文する。口は大きくひらき、高台にむかって小さくすばまる皿が多い。また、蓮弁文様をかたどった器台もみられる。白釉褐彩磁は李朝から生産はじまるが、このころは蓮弁の文様のある磁州窯の製品を模倣して生産されている。また、白磁や緑釉、黄褐釉の建築装飾などが出土しており、竜や鳳凰、獅子をかたどっている。

中国宋代の陶磁器では、白磁や青白磁、青磁など多彩な製品がみられる。青白磁は内外面全体に雲文を陰刻し、高台内は無釉で丁寧に削られている。南宋の景德鎮窯の製品であり、高台内に窯道具の痕跡がのこる。合子の蓋もみられ、南宋の製品である。西村窯の碗類では、花や葉文を陰刻あるいは陽刻し、外面は縦線を刻む。釉は青灰色で、底部は赤褐色で中心を施釉する。長沙窯の灰白釉水注や菊花文や雲文を描く碗皿類（図1）もみられる。青磁では越州窯（図2）の製品が多数出土している。玉壁高台の碗は特徴的な遺物である。このような中国の初期貿易陶磁器が出土するのは、ベトナムでは北部のクアンニン省ハロン市のパイチャイや窯業地キムラン⁽¹⁾、ドゥオンサー、中部のホイアンやクアンガイ省の海底などで多数発見されている。

そして、交趾洋の交易をあらわす特徴的な遺物としてイスラーム陶器⁽²⁾（図3）がある。9世紀から11世紀に生産された濃い青釉の陶器片である。このようなイスラーム陶器は、ベトナムでは中部ホイアンでも発見されており、それはホイアンの西に位置するチャンソイ、ホイアン沖のクーラオチャム島、そしてホイアンの南に位置するチャンパー王国の都チャキュウである。

李朝が成立した前後の時期、東アジアから西アジアにかけての海域の各地では、同様に中国の初期貿易陶磁器である越州窯の青磁や長沙窯の黄釉製品、定窯の白磁、そしてイスラーム陶器が確認されている。それは、東アジア地海域でムスリム商人が拠点にしていた中国南部の港市である泉州や広州、博多の鴻臚館遺跡やマレー半島のクラ地峡を挟んで東西に位置するコーカオ島遺跡とポー岬遺跡、スリランカ北東部のマンタイ遺跡、パキスタンのカラチ近郊、バンボール遺跡、ベルシャ湾のシーラーフ遺跡、エジプトのフスタート遺跡などがあげられる〔三上 1984：330〕。

ここで、ベトナムにおいて中国の初期貿易陶磁器とイスラーム陶器が共伴する遺跡としてクー

(1) 李朝初期にキムランで大造成がおこなわれ、その際に流入したものとされる〔西村 2011：273〕。

(2) 青緑貼付文壺。中近東地域で9～10世紀を中心に生産された陶器を総称してイスラーム陶器という。インド洋交易の商品を入れるコンテナとして西から東に運ばれていた。ベルシャ陶器、エジプト陶器、トルコ陶器などに細分される。その研究は〔岡野 2013〕にくわしい。

ラオチャム島⁽³⁾を紹介したい。クーラオチャム島はホイアンから東に 20km 離れた海中に浮かぶ大小の島からなる。9 世紀から 10 世紀において、チャンパー王国の海上交易活動の拠点であった。『インド・シナ物語』には、チャンパーは「サンフ」として登場し、中国に向かう船は「スンドルフーラート」に向かうこと、ここでは真水が得られることが記されており、これがクーラオチャム島に比定されている〔藤本 1976：85〕。9 世紀からすでにムスリム商人の交易ネットワークにおける寄港地となっていたことがわかる。

1990 年代のはじめにホンラオ地区で踏査がおこなわれ、バイラン地点でイスラーム陶器が発見された。1998 年から 99 年に実施された発掘調査や、2017 年から昭和女子大学が中心となって実施している発掘調査でも、イスラーム陶器のほかにイスラーム・ガラスが多数発見されている。

『宋史』や『宋会要輯稿』などには、玻璃器のほか、玻璃に入った薔薇水、眼薬、白砂糖、味子、扁桃などが大食、注輦、于闐、高昌、回鶻、層檀、三仏齊、占城から献上されたとの記録がある。占城はチャンパー王国であり、クーラオチャム島でのイスラーム・ガラスの出土は、ガラス器が海上ルートで中国に運ばれていたことを示している。中国陝西省法門寺地下宮で発見されたイスラーム・ガラスは海上ルートによって運ばれたことが指摘されているが、クーラオチャム島でも同様の貼付装飾瓶（図 4）やラスター彩碗が出土しており、8 世紀後半から 9 世紀前半にかけてシリアやエジプトで製作された製品が海上ルート通じて中国にもたらされたと考えられている〔真道 2000〕。

西アジアと中国をつなぐインド洋そして南シナ海の間に張りめぐらされた、ムスリム商人による東西世界の経済・文化交流のネットワークが存在し、北部及び中部ベトナムはその寄港地であった。

なお、昇竜皇城遺跡では李朝の陶磁器が多数出土しているが、ベトナム以外の地では発見される例はわずかである。李朝段階では国内消費むけ、おもに昇竜城の建築部材や、宮殿内での生活に用いられる陶磁を生産していたと想定できる。東南アジアで発見されている李朝陶磁器は、中国陶磁器のように一定の規模で輸出されたのではなく、ムスリムや中国の商人によって担われていた海域アジアの交易ネットワークによって偶発的に運ばれたものであろう。

3. 陳朝期の遺跡にみる輸入陶磁器

李朝末期の内乱に乗じ、皇帝の外戚であった陳氏が帝位を奪い、1225 年に陳朝がたつ。陳朝は、上皇政治をおこなうことにより安定的王位継承を実現するとともに、父系同族集団の結合を強化し、王族が中央を独占することで安定的な政権を目指した。李朝が豪族の連合体であったのに対し、陳朝は宗室を封じることにより、各勢力の上に陳朝宗室がかぶさるような形で統治を進めたとされる〔桃木 1982〕。

陳朝は、李朝と同様に昇竜城を国都としていたが、同時に陳氏の故郷である即墨、現在のナムディン省トゥックマックの地を 1262 年より天長府とし、上皇が居住し、陳朝の副都として政治の中心地としていた。また、その周辺から沿岸部にかけて貴族の荘園が作られた〔桜井 1989：

(3) ホンラオ、ホンザイ、ホンモー、ホンラー、ホンホー、ホントイ、そしてホンオンの大小七つの島々をさす。

275-300)。昇竜と天長府、双方の遺跡では、陶磁器の生産がおこなわれており、同時にその宮殿において使用されていたため、生産遺跡でもあり、消費地遺跡でもある。

昇竜皇城遺跡では、陳朝期の陶磁器が多数出土している。ベトナム製品では、青磁や白磁、褐磁、白釉褐彩磁、初期鉄絵など、陳朝の特徴的な陶磁器が出土している。青磁では、外面に蓮弁文を有する酒海壺の身部などがあり中国の竜泉窯系の製品の模倣である。

このほかに、白磁や青磁には内面に5か所の目跡があり、范により花文や蓮弁文を施文する碗類が多数出土している。初期鉄絵の瓶は、元の初期の青花を模倣したものである。

白釉褐彩磁では、比較的大型の蓋付き甕や鉢がみられる。外面には花文や花唐草文、鳥文を描き、その図柄構成は14世紀に生産されていた中国の竜泉窯系青磁を模倣しているのだろう。また、器種にはバラエティがあり、白釉褐彩磁が当時好んで使われていたことがわかる。赤茶色の施釉しない埴や軒先瓦、軒飾り、棟飾りなども李朝に引きつづき生産されていたようだが、李朝のころのものにくらべると、作りが雑になってきている。

交易品としてベトナムにもたらされたものとして、中国の陶磁器がある。陳朝に並行する元の製品では、青磁や白磁、青花などがみられる。青磁では内底面に魚文を施す鏢緑皿（図5）や蓮弁文のある碗・皿類、花唐草を巡らせた鉢、香炉などが多数出土し、いずれも竜泉窯の製品である。白磁では、枢府手のもの（図6）がみられる。元の青花では、蓮花や鴛鴦、海馬、草花、蓮弁文などを描く碗がみられ、景德鎮窯系の製品である。

このほか、ベトナム北部で中国の陶磁器が多数発見されている陳朝期の遺跡としては、ホアビン省キムボイ県ヴィンドン社に位置する、歴代のムオン民族領主（土酋）の埋葬地であるドンテック遺跡があげられる。

ベトナム考古学院と旧ハソンビン省文化課が1984年から89年にかけて発掘調査を実施し、墓はみな長方形の堅穴墓で周囲に自然石を立石する、いわゆる巨石墓の形式であることがわかった（図7）。特に、B地区のM17号墓では、多数の陳朝や中国の竜泉窯系の陶磁器が出土している。M17号墓は、20個の立石が配されている。盛り土は高さ1.2mで15m×15mの方形の墳墓である。主体部の床には焼締鉢81個が立てた状態で5列にわたって並べられており、また多数の陶磁器が出土している〔Trịnh Cao Tường (et al.) 1984: 17, 20〕。

陶磁器は、磁器碗10点、磁器皿1点、磁器水注3点、磁器壺3点、器台（または硯）3点、銅製品20点、銅銭65点、銀製品5点、石製品、骨など総数223点にのぼる〔Phạm Quốc Quân 1994: 54〕。中国の竜泉窯系の青磁製品が8点あり、碗は蓮弁碗がほとんどである（図8）。ベトナム製品は焼締陶器のほかに13点で、外褐内白釉碗5点、白磁製品5点、緑釉製品1点、褐釉製品1点等である。遺物はいずれも14世紀代であり、14世紀に埋葬されたと思われる。

これらの陶磁器は、海岸線から遠く離れた山岳地帯の少数民族が、独自の交易、交流ルートによって入手したとは考え難く、陳朝からの下賜品と考えられる。

4. 中国陶磁器を受け入れていた港－雲屯－

上述の通り、ベトナムでは陳朝期の遺跡からベトナム陶磁器の他に、宋から元の中国陶磁器が

一定数出土している。ベトナム沿岸部の港の遺跡からは多数の中国陶磁器が確認されており、これらの陶磁器は、海路で運び込まれてきたものであることがわかる。以下に、ベトナムの港遺跡の考古学調査成果を提示するが、その詳細は〔菊池 2017〕を参照されたい。

15 世紀にまとめられたベトナムの官撰史書『大越史記全書』には 1149 年の出来事として、外国の商船がトンキン湾に来航し居住と商売を求めたため、雲屯という庄を設けたことが記されている。雲屯の位置はクアンニン省のハロン湾の一部を占めるヴァンドン（＝雲屯）県の島にあったことが過去の研究から明らかになっている〔金 1937：67〕〔山本 1939〕。

陳朝期には、大越国はモンゴルからたびかさなる攻撃をうける。1287 年から 88 年にかけての侵攻（元寇）では、張文虎率いる元の兵糧運搬船が広東からベトナムにむけ出航し、雲屯で陳軍の軍船と戦っている〔山本 1939：5〕〔山本 1975：128-129〕。中国からベトナムの地へいたる航路上に位置し、そのままホン河に入り国都昇竜へいたることのできる雲屯は、貿易港としてだけでなく、防衛上も重要な地点であったといえよう。

筆者がハロン湾のヴァンドン県一帯でおこなった考古学的踏査では、人の住む比較的大きな島で遺物の集中的な分布が確認できた。特に、コンタイ島に多くの遺物が分布しており、コンタイ島第 5 地区において 2002 年に発掘調査をおこなった。

調査地点は、コンタイ島の船着き場から南へ 2km の地点で、島の南端部である。付近の海岸には多くの中国陶磁器が分布しており、付近の比較的広い平地がある場所にトレンチを設定した。

このトレンチの土層は、7 層に分層できたが、第 2 層から第 3 層にかけて（深さおよそ 30cm）、トレンチの南側から中国陶磁器の破片が折りかさなるようにして出土した。第 4 層を掘りこんで集積された遺物であろう。第 4 層は小石を多く含む層である。遺物はベトナム陶器がほとんどで比較的少ない。第 5 層は炭化物を多く含む層で、遺物も多い。遺物は熱をうけたようで、細かく粉碎し、表面が円形に剥離していた。第 6 層は第 5 層の直下で、炭化物と小石を多く含む層である。ここでも遺物が集中して出土した。遺物の年代は 13 世紀中ごろが中心であった。炭化物を多く含み、他の年代の遺物の混入がみられない第 6 層から炭化物をサンプリングし、C14 年代測定をおこなった。その結果、炭化物の年代は 1220 ～ 1280 年という結果をえた⁽⁴⁾。同じ第 6 層で出土した中国青磁は、日本の元寇の遺跡である鷹島海底遺跡で発見された中国の青磁と同様の、13 世紀中頃から後半の製品である。下層部出土遺物の年代とも合致しており、考古学的にも自然化学的にもこの層位が 13 世紀代の土層であることを示している。

コンタイ島第 5 地区地点から出土した遺物総数は 2,555 点で、すべて陶磁器片であった。

上層では、中国陶磁器が中心となり中でも青磁が多数を占める。ベトナムの製品は焼締陶器が中心となる。下層では、ベトナム陶磁器が中心となり、ベトナムの白釉搔落褐彩壺が出土している。

ベトナム陶磁器では大型の焼締長銅瓶や外面に「縄簾文」のある陶器鉢が多数出土している。蓋では、つまみ部分のみ手びねりで作られるものや、胴部に凸帯があるものがあり、ともに無釉である。施釉のものでは白釉搔き落し褐彩壺（図 9-1）や白磁壺、白磁碗がある。白磁壺は底部

(4) バレオ・ラボ AMS 年代測定グループである小林紘一他 6 人により、コンパクト AMS（NEC 製 1.5SDH、バレオ・ラボ所有）を用いて測定し、得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

片で、内側に胎土目がある。高台は貼り付け高台となっており、大型製品であろう。白磁碗は陳朝期の製品で、内側に目跡がのこり、高台は細く厚底である（図9-2）。

中国陶器では、褐釉の壺や磁州窯の白地褐彩壺（図9-3）があり、14世紀の製品である。磁州窯の製品は、ベトナムではほとんど確認されていない。また、泉州で発見された沈没船から大量に発見された中国南部産の泉州壺（図9-4）も出土した。長胴で頸部が小さくすぼまる。インドネシアなどでも多く出土しており、貿易品の容器である。

中国磁器では、竜泉窯系の青磁、特に大型のものが目を引いた。それは大型の瓶（図9-5）や酒海壺、鉢などで、14世紀後半の元末明初の製品が多かった。大型の鉢（図9-6）には、底部に穴が開いた状態に成型し、その後、型で紋様を成型した見込み部を内側から貼りこんでいるものがあり、トルコのトプカピ宮殿に同様の製品がある。これらの陶磁器は、優品として名高い新安海底遺物⁽⁵⁾や首里城跡、トロウラン遺跡にも類例をみることができる。考古学的にも美術史的にも学術的価値のたかい遺物である

中国景德鎮窯系の白磁碗もあり、中には枢府手の製品も見られた。内面に范で花文を施文する、14世紀の製品である。また、14世紀後半の元の青花も出土している。さらに、出土品ではなく発掘地点周辺の表採資料であるが、ビーズ繋ぎ線文で装飾された元の釉裏紅製品も発見されており（図10）、類似品としてアイルランド国立博物館蔵のケイニエル・フォントヒル瓶があげられる。質の高い製品で、トロウラン遺跡でも、ビーズ繋ぎ線文装飾の青花釉裏紅壺が発見されている。

調査の結果、13～15世紀を代表する中国の貿易陶磁器が出土遺物の7割をしめた。なかでも、14世紀後半の製品が多く、元末明初（＝陳朝期）にかけて生産され、中国からさかんに海外に輸出された貿易陶磁器である。コンタイ島第5地区一帯は中国陶磁器を満載した外国籍貿易船の停泊地であり、雲屯までの航路で破損した陶磁器を荷下ろしのさいに破棄した場所と推定できる。

同様の中国陶磁器は、前述の通り昇竜皇城遺跡で出土している。少数民族の領主墓でも出土しているが、これらの陶磁器は陳朝からの下賜品と考えられており、朝廷と関係する特定の遺跡から出土していると言える。中国陶磁器は、ベトナム北部においては特別な製品として宮廷や関連する施設で使用されていたのだろう。そして雲屯は朝廷にもたらされる商品が運ばれた港と位置づけることができる。

ただし、昇竜皇城遺跡から出土している陳朝期の中国陶磁器はわずかであり、雲屯港にもたらされた中国陶磁器は、大越国むけの商品ではなく、中継貿易によってその大部分がマジャパヒトなど海域アジアへ分散していったのであろう。ヴァンドン出土中国陶磁器とインドネシアのトロウラン一帯やトゥバン海域で発見されている陶磁器群〔アブ・リド他 1983〕には共通性がみられる。中国から雲屯に運ばれるのと同時に、あるいは雲屯の地を経由してトロウランに陶磁器が運ばれていたことをしめしている。

また、ヴァンドンの発掘調査では、ベトナム陶磁器の出土は全体の3割程度と多くない。しかし発掘地点の周辺では、陳朝期の陶磁器片の分布が確認できる。日本の九州、特に北部九州沿海域や首里城二階殿跡、さらにはトロウラン遺跡でも、14世紀後半のベトナム陶磁器が集中して

(5) 1323年に中国の浙江省の寧波を出航し、博多へ向かったが、途中東シナ海で遭難、沈没したとされる貿易船。船体は長さ約30m、幅9m、およそ200t。船底は竜骨をもつV字形の外洋船。

出土しており、これらは雲屯港の後背地であるハイズオン一帯で生産された製品である。雲屯港は、陳朝期のベトナム陶磁器の積み出し港として、海域アジアに商品を生供給する港であった。

5. インドシナ半島内陸部と海域アジアをつなぐ港－会統－

ベトナム・大越国の沿岸部、中でも大きな河川の河口部には、古くから港が成立しており、ヴァンドンの他にも、陳朝期の陶磁器が出土している港の遺跡がある。大越国の史書『大越史記全書』1349年の条に、李朝期からあった港として演州があげられている。演州は現在のゲアン省、ハティン省一帯（ゲティン地域）で、中国の商船が来航していたと記述されている⁽⁶⁾。また15世紀の黎朝初期の阮廌が記した『抑齋集』によると、雲屯や会統では外国人の立ち入りが許されていた⁽⁷⁾。

15世紀にまとめられた『洪徳版図』には、会統の地名が川の河口部に記されており（図11）、宜春や興元といった現在も残る地名から考察して、会統はゲアン省とハティン省の省境を流れるラム川の河口部であることがわかる。また、ラム川左岸、ハティン省側の河口部にはホイトン（＝会統）集会場があり、その名を残している。ラム川はラオスとの国境、チュオンソン山脈から発する。ゲティン地域は、南北に長いベトナムの中でも、最も幅が狭く、ラオス国境に近い。海岸線を持たないラオスの都ヴィエンチャンから見ると、ラム川を使ったルートは、最短距離での海への出口となる。

12世紀以降、大越国・李朝はチャンパーや真臘、宋といった外国勢力の侵攻に迫られる。とりわけ真臘は、たびたび父安（ゲアン）に侵攻しており、カンボジア地域にとっての南シナ海交易圏への出口としてのゲアン、ハティンのルートが重要であったことが指摘されている〔桃木2001：51〕。

ゲティン地域は、チャンパーおよびカンボジアと大越が接する地点であり、またゲティンからチュオンソン山脈を越えて陸真臘（東北タイ、南ラオス）にいたるルートが唐代に成立しており、真臘が南シナ海交易にアプローチするにもこのルートが重視されていたことから、ゲアンの重要性が指摘されている〔桃木2011：136〕。

筆者は、ゲティン地域における交易の様相を明らかにする目的から、2015年よりラム川河口部の周辺において発掘調査を実施している。

陳朝期の遺物が出土したのはラム川左岸の河口部、ハティン省スアンホイ村ドンスー地区にあるホイトン集会場周辺での発掘調査である。カー神社の西側320mはなれた畑の中で実施した調査では、地表面下60～70cmのところから陳朝から黎朝前期にかけて生産されたベトナム陶磁器と僅かな中国陶器が出土した。

ベトナム陶磁器では、大型の焼締鉢（図12）や長銅瓶が大量に出土した。このほか、白磁では、見込部分を蛇の目釉剥ぎしたり、目跡が残る深皿が多い。なかには、范で内面に波の文様を施文

(6)『大越史記全書』1349年（陳裕宗紹豊9年）

先是、李朝時商舶來則入自演州・他員等海門。

(7)『抑齋集』「輿地志」

外國諸人不得擅入内鎮。悉虛之雲屯・萬寧・芹海・會統・會潮・葱嶺・富良・三奇・竹華焉。

し、見込み部に「官」の文字が范で施文された碗があり（図 13）、昇竜皇城あるいはキムラン村など、ハノイ周辺の窯業地で生産された官窯の製品である。黎朝の 15～16 世紀に生産されたもので、范で内面に波の文様を施文した同様の白磁碗は、大分県の大友府内遺跡でも発見されている。

また、褐釉（図 14）、緑釉（図 15）の製品では、見込部分を蛇の目釉剥ぎにして、内側面に蓮弁文を范で施文した碗が多い。これらの陶磁器は、ベトナム国内をはじめインドネシアや沖縄からも多数出土しているベトナムの貿易陶磁器である。青花では、草花文や文字を施文し、高台内をチョコレートボトムにしたものもあるが（図 16）、大部分は圈線のための簡素な製品である（図 17）。

中国の陶磁器は褐釉壺と泉州壺の胴部片 2 点のみ出土した。泉州壺はヴァンドンでも出土していた貿易品の容器で、褐釉壺も同じく容器として海域アジアの各地で発見されている。

上述の考古学調査成果により、ゲティン地域は 13 世紀の陳朝以降、交易をおこなう港であったことが考古学的に確認できた。ヴァンドンでもベトナムの陳朝から黎朝の白磁や褐釉、緑釉製品、青花などが多数出土しており、これらはその後背地である窯業地ハイズオンやハノイから運ばれてきたものであった。同様の製品はホイトンでも出土しており、遠く離れたハノイやハイズオンで生産されたものが、ダイ川を下りタインホア省のラックチュンで海に出て、そのまま沿岸を南下してゲティン地域まで交易のために運ばれてきたと考えられる。

では、ゲティン地域での交易活動はどのようなものだったのだろうか。近年ラオスでは、首都ヴィエンチャン市内の発掘調査で大量の陶磁器が出土した。その数は 111,738 点で、うち、中国陶磁器は 6,896 点、タイ陶磁器は 1,344 点、ベトナム陶磁器は 524 点、日本陶磁器は 414 点であった。このほかに、ヨーロッパやクメールの陶磁器も出土している〔清水 2013：35-36〕〔清水 2015〕。年代で見ると、9 世紀から 11 世紀段階ではクメール灰釉陶器や西村窯白磁等が若干あるが、12 世紀から 15 世紀段階はベトナムやタイの製品でしめられる。16 世紀後半代から中国景德鎮窯青花が増加し、以降 18 世紀代にかけて、中国製品は景德鎮・漳州・徳化ほか福建広東諸窯の青花・五彩などの製品が 6,000 点以上出土した。

ベトナム陶磁器は、陳朝期の青磁や白磁、白釉搔落褐彩製品が含まれ、15 世紀以降の黎朝の青花や五彩が中心となるため、ラオスへの搬入・流通年代の主体を 15 世紀から 16 世紀と推測している〔清水 2013：36-37〕。ホイトンでも、陳朝期から黎朝期の陶磁器が多数出土しており、ラオスで出土するベトナム陶磁器の搬入経路の一つと考えられる。インドシナ半島内陸部、ラオスの森林地帯に産する香木と、ベトナム陶磁器の交易の窓口としてのホイトンの港の存在が想定できる。

おわりに

宋以降、海域アジアの交易ネットワークは活況を呈していた。大越国・李朝期において、ベトナムの地は、西アジアと中国をつなぐインド洋そして南シナ海の間に張りめぐらされた、ムスリム商人による東西世界の経済・文化交流のネットワークにおける寄港地となっていた。

陳朝期になると、ベトナム陶磁器は、日本の壺岐、対馬や沖縄の首里城跡で、インドネシアではトロウラン遺跡で多数発見されるようになる。これらの陶磁器は、ベトナム北部の雲屯港に立

ち寄った、中国貿易陶磁器を満載した貿易船によって運ばれていた。

このような流れにあって、続く黎朝期の陶磁器は首里城跡やトロウラン遺跡から大量に出土するようになり、大型製品や特注品まで生産するようになっていた。同時に、インドシナ半島内陸部と海域アジアをつなぐ窓口として、ベトナム北中部の港会統での交易活動も活発となっていく。

大越は、陳朝末期から黎朝期にかけて、それまで受動的であった海上交易に対し、能動的に参加するようになっていったことを示している。そしてその活動は、大越の産品を商品とする以外に、その地理的特性を生かし、他国の産品をも中継するハブとしての活動も包括していた。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP15H06899「海域アジア交易におけるベトナムの役割－ゲアンの考古学調査から－」（研究代表：菊池百里子）及び JSPS 科研費 JP17K03229「日越交流史の新展開－ゲティン地域における朱印船貿易解明のための考古学調査－」（研究代表：菊池百里子）の助成を受けたものである。

引用文献

アブ・リド、ワヤノ・M（亀井明德訳）：

1983「東ジャワ・トゥバン発見の陶磁」『貿易陶磁研究』No.3：77-78

岡野智彦：2013「西アジアの陶磁器生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学 アジアの考古学1』高志書院：43-65

片倉 穰：1972「ベトナム・中国の初期外交関係に関する一問題―交趾郡王・南平王・安南国王などの称号をめぐる―」『東方学』第44輯：40-105

河原昌博：1975「李朝と宋との関係（一〇〇九―一二二五年）」、山本達郎編『ベトナム中国関係史』山川出版社：29-82

菊池百里子：2017『ベトナム北部における貿易港の考古学的研究―ヴァンドンとフォーヒエンを中心に―』雄山閣

金 永鍵：1937「雲屯と日本人」『歴史学研究』第7巻第8号：66-70（のちの〔金1943：170-177〕）

グエン・ディン・チエン、阿部百里子：

2006「ベトナム・ハノイ昇龍皇城遺跡発見の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』26：165-163

桑原隲蔵：1935『蒲壽庚の事蹟』岩波書店

桜井由躬雄：1980「10世紀紅河デルタ開拓試論」『東南アジア研究』17-4：597～632

1989「陳朝期紅河デルタ開拓試論1. 西沱濫原の開拓」『東南アジア研究』27巻3号：275-300

清水菜穂：2013「ラオス出土のベトナム陶磁」『国際シンポジウム：14・15世紀海域アジアにおけるベトナム陶磁の動き―ベトナム・琉球・マジャパヒト』昭和女子大学国際文化研究所：35-43

2015「ラオス出土のヴェトナム陶磁」『14・15世紀海域アジアにおけるベトナム陶磁の動き―ベトナム・琉球・マジャパヒト―』昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.21：109-124

真道洋子：2000「9～10世紀におけるガラスの東西交流―ベトナム、クラーオチャム出土のイスラーム・ガラス―」『月刊考古学ジャーナル』No.464：12-15

西村昌也：2011『ベトナムの考古・古代学』同成社

藤本勝次訳：1976『インド・シナ物語』関西大学出版

三上次男：1984「ベトナム陶磁と陶磁貿易」、三上次男編『世界陶磁全集16 南海』小学館

桃木至朗：1982「陳朝期ヴィエトナムの政治体制に関する基礎的研究」『東洋史研究』41（1）：84-121

- 1990 「10-15 世紀の南海交易とヴェトナム」『世界史への問い 3 移動と交流』岩波書店、225-256 頁（のちの桃木 2011：第 3 章に組み込み）
- 2001 「唐宋変革とベトナム」『岩波講座 東南アジア史』2、岩波書店：29-54
- 2011 「中世大越国家の成立と変容」大阪大学出版会
- 山本達郎：1939 「安南の貿易港雲屯」『東方学報』第 9 冊：1-33
- 1975 「陳朝と元との関係（1225-1400）」、山本達郎編『ベトナム中国関係史』山川出版社：83-153
- 米田諒典：2000 「ラオスの香の旅（3）—沈香資源のこと—」『香料』No.205：33-38
- Nguyễn Văn Anh, Bùi Thu Hương：
- 2012 “Vật liệu kiến trúc ở Hoàng thành sau 5 năm nghiên cứu”, 『日越タンロン城関連研究論集』（独）国立文化財機構東京文化財研究所：163-170.
- Phạm Quốc Quân：
- 1994 Các di tích mộ Mường cổ ở Hòa Bình và Hà Tây, Tư liệu về Khảo cổ học.
- Tống Trung Tín và Bùi Minh Trí(ed.)：
- 2010 *Thăng Long –Hà Nội – Lịch sử nghìn năm từ đất*, Nhà xuất bản Khoa học Xã hội Hà Nội.
- Trịnh Cao Tường, Phạm Thị Liên, Lê Đình Phụng, Lê Thị Liên：-
- 1984 *Báo cáo khai quật khu mộ Mường, Đông Thếch (Hà Sơn Bình)*, Tư liệu về Khảo cổ học.



図 1 ホアンジウ 18 地点出土 長沙窯灰白釉菊花文皿、灰白釉雲文皿 [グエン他 2006]

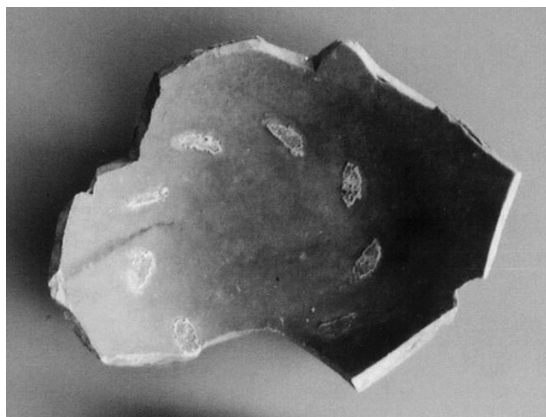


図2 ホアンジウ 18 地点出土
越州窯青磁碗 [グエン他 2006]

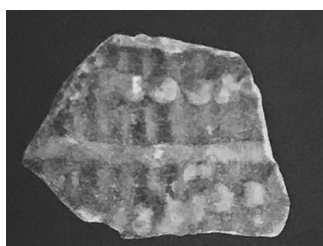


図3 ホアンジウ 18 地点出土
イスラーム陶器
[Tống Trung Tín (et al)
2010]



図4 クーラオチャム島バイラン地点出土
イスラーム・ガラス

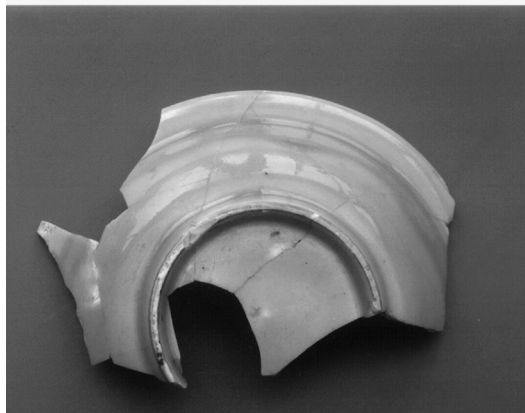
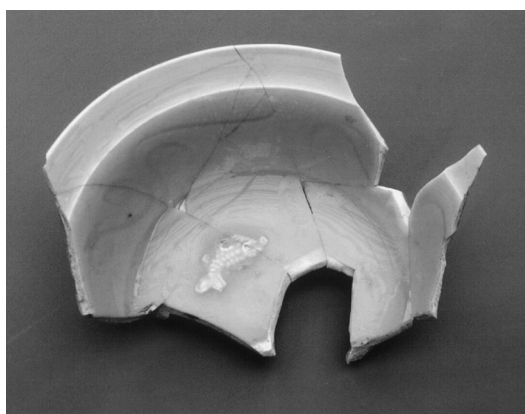


図5 ホアンジウ 18 地点出土 竜泉窯青磁皿
[グエン他 2006]

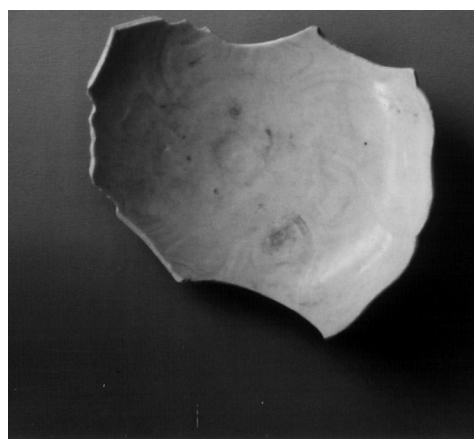


図6 ホアンジウ 18 地点出土 景德鎮窯白磁碗
[グエン他 2006]



図7 ドンテック遺跡 巨石墓



図8 ドンテック遺跡 M17号墓出土 竜泉窯青磁碗

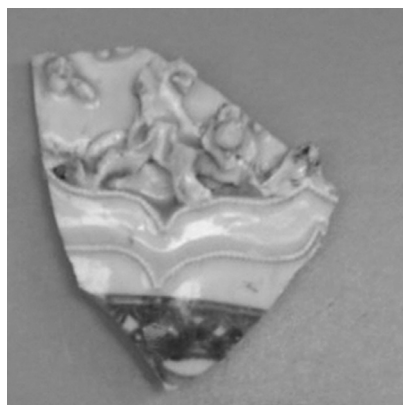


図10 ヴァンドン県コンタイ島表採
ビーズ繫ぎ線文釉裏紅製品

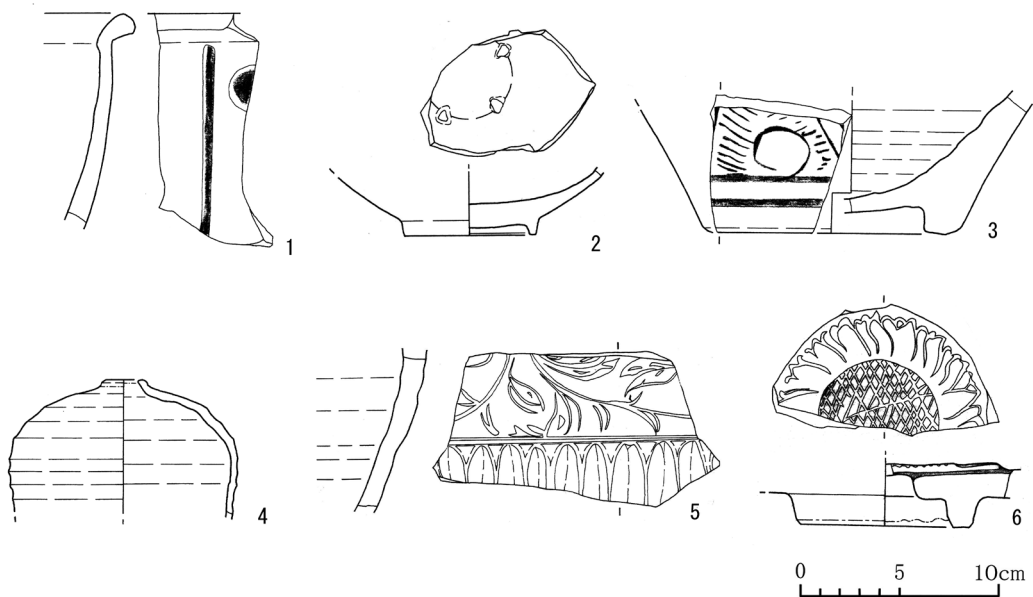


図9 ヴァンドン県コンタイ島第5地区出土陶磁器

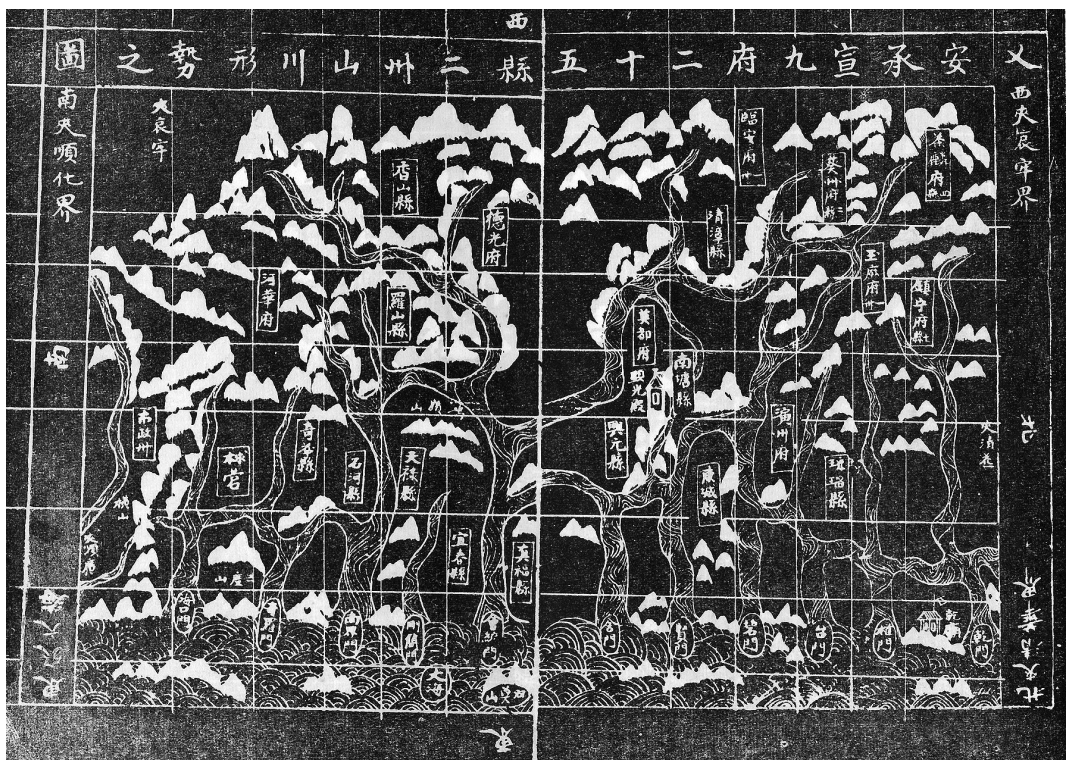


図11 洪徳版図



図12 ホイトン出土 ベトナム焼締鉢



図13 ホイトン出土 ベトナム白磁碗 見込部に「官」(左側)



図 14 ホイトン出土 ベトナム褐釉碗

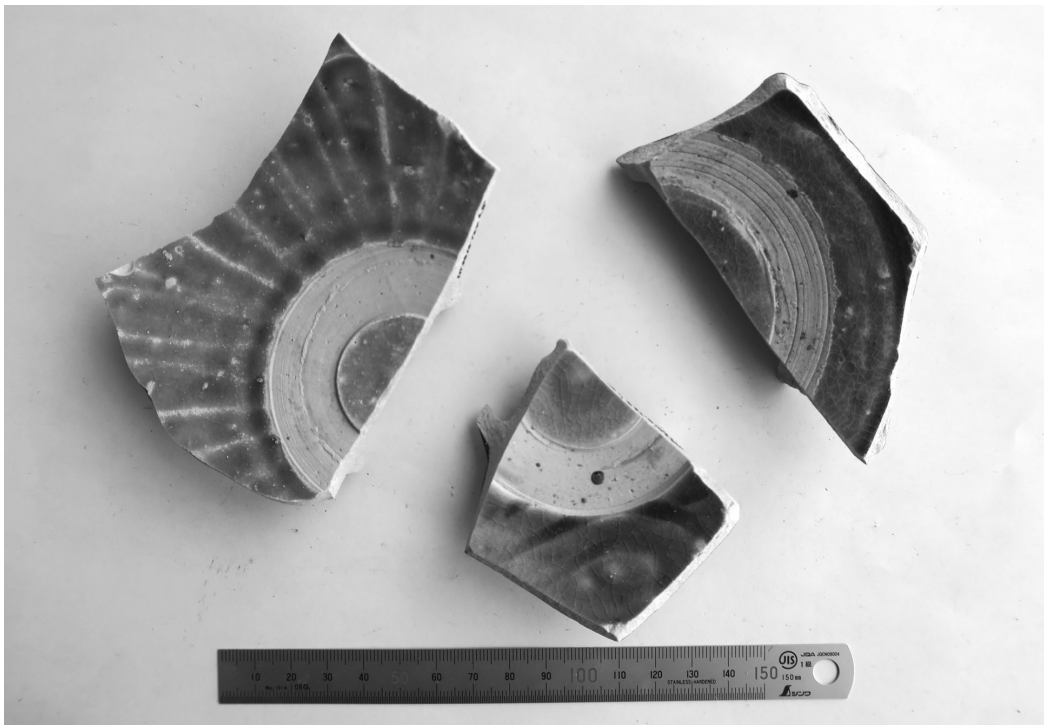


図 15 ホイトン出土 ベトナム緑釉碗



図 16 ホイトン出土 ベトナム褐釉碗

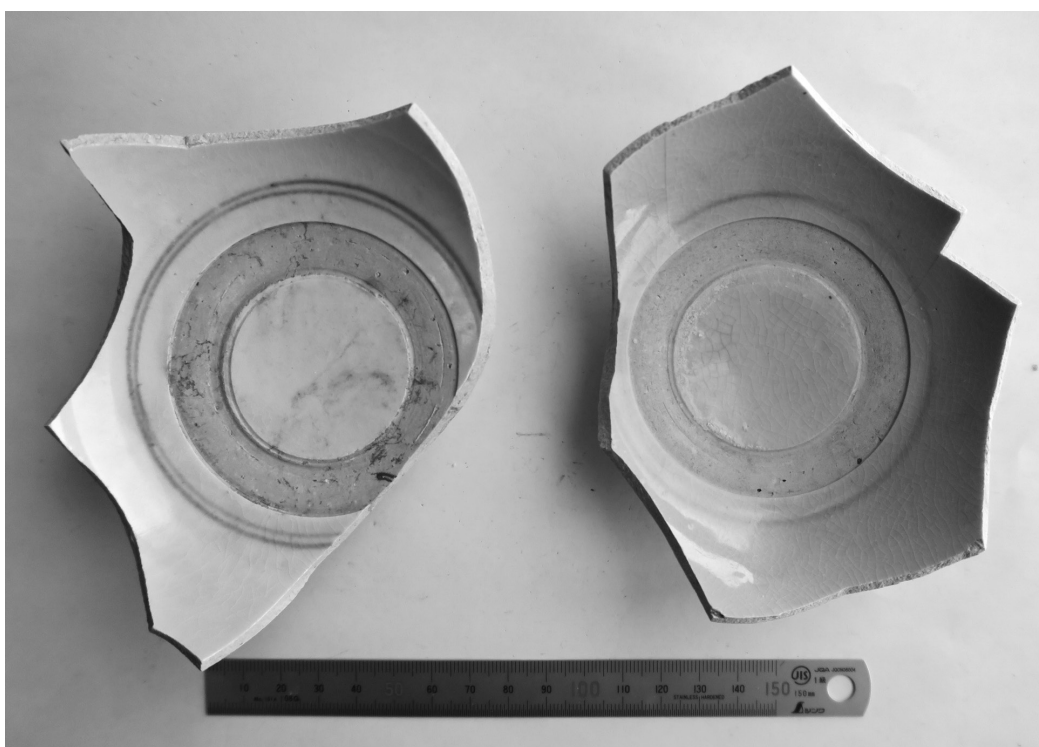


図 17 ホイトン出土 ベトナム緑釉碗